

## 「こと」の星座

此のことの弦(いさ)の音(れ)は

聖(きよ)き耳(みみ)にのみ聞(き)こゆ———ロ—エル

神話によれば、<sup>リラ</sup>琴はヘルメスが發明した天琴であつて、其れをアポロは、かのアルゴ船の遠征に加つた音楽者オルフィウスに與へた。

詩の中に此の樂手の優れた才能を歌つた人は多い。シェクスピーアは其の詩の中に、

彼れの音楽を聞く者は誰でも、

海の波さへも、

もう、頭を垂れて、そこにへたばつて了ふ

と言ひ、又、「ゴロナの二紳士」の中にも、彼は、

オルフィウスの琴は其の主の手にうたれるさ、

其のひびきは、鐵や石をも軟らげ、

虎を馴れさせ、大きな海獸も、

底無し海を見捨て、砂の上に踊る。

と言つてゐる。

譯しによれば、オルフィウスは、地獄にまでも下つて、其のハープの音で魔王バルートを迷はせ、遂に其の愛妻エウリデイスを奪ひ返したのであるが、下界から逃れ出る時に、禁じられてゐたにもかゝらず、後を振り返つたものだから、又々、妻を失つて了つたと言ふ。死後は神に召され其の琴は星座の一つに擧げられた。

マクス・ミユラー教授は、此のオルフィウスを、サンスクリット語で太陽の稱號たる「アルブー」に同じだと言ふ。此の説明法によれば、太陽が追蹤するエウリデイスは、曉天に廣がる朝やけの擬人化であるが、其れは、朝やけが闇の世界の夜の蛇にかまれたためである」<sup>1</sup>と言ふ。太陽が此のエウリデイスを一旦取り返しはしたけれど、振り返つて妻を見るや否や妻は消えたと言ふのは、日の出の榮光の前に朝の霧が消えるのを意味するのであると言ふ。

コクス氏は、オルフィウスの音楽が、日出や日没に伴なう微風の軟かな感じであると言つてゐる。

マーテン夫人は此の星座に就いて愉快けに言ふ。「心地好い春の夕暮の空に此の星座が、輕やかに空に懸かり、主な星々をつなぐ平行線はかすかに弦を張つた樂器の形を思はせ、妙手が觸れば天來の音が大气に共鳴して響きわたるを思はせる故に、此の星座が此の名を與へられたことについての想像は極めて自然である。」

ことは又、かのコリント王ペリアンデルの宮廷に仕へた音樂手アリオンの

「たて琴」だとも考へられる。古譚によれば、アリオンはシシリアからの歸途、舟夫たちのために舟から海へ投げ出されようとした時、琴を弾くからと言つて許されたが、此の願ひが許されるや否や、海から海豚が多く現はれ、此の樂の音を喜んだので、アリオンが海へ飛び込むと、海豚たちは彼れを背負つて安全に陸へ運んだといふ。

ブラウン氏に據れば、ことに關するギリシヤ神話は、「ヘルメス(雲の神)が龜の甲から琴を作つた」シホメロスの詩の中にある通り、比較的後期のものであるといふ。

此の星座の大昔の歴史は、エウフラテ式と、フェニシア式と、二様になつてゐる。エウフラテ河畔では、此れは始めヘラクレスに對抗した三羽の鳥の一つであつた。そして首星ゼーガは「落ちる鷺」と考へられた。ウルー・ベイの書を註譯した或るアラビヤ學者によれば、エプ星とゼ星とは鷺の兩翼であつて、今、地に落ち行く鳥の姿を表はすのだと。

フェニシア地方では、此の星座は一つの樂器であつた。アラトスは之れをヘーロス(小さい龜甲)と呼んだが、それは即ち、古譚の最初に立ち歸つて、岸に打ち上げられた龜甲の空洞の意味であらうと、アレン氏は説いてゐる。

ブレーク氏は此の星座と龜との關係について下の如く言つてゐる。「此の星座の名が與へられた頃、首星ゼーガは多分天の北極に近かつたのだらう。従つて運動が遅いので龜と呼ばれ、それがギリシヤ人に容易にことと轉化されたのであらう」と。

かうした二重の意味があつたため、マーキュリ神が龜の甲から琴を作つたといふ譚となつて了つたのが確かであらう。

又、或る説では、此のことはヘルクレスの勞苦を和けるため其の近くの星座に置かれたのだといふ。バリト氏がこと座について次の面白い文を書いてゐる。

「琴は古人が屢々用ゐた有名な樂器であつた。之れは此の世界の二千年頃マーキュリーが發明した。しかし或る人はユバルが本當の作者であるとも言ふ。とにかく、琴が、ギリシヤでは最初に用ゐられた弦樂器であつたことは世人が一般に知つてゐる。時代々々により、琴は四本乃至八本の弦を有つてゐた。」

オギドに據れば此のことは七弦を有つてゐるといふ事であるが、此の星座に七といふ神祕な數が與へられてゐるのは、おほくまの七星や、ブレヤデスの七つ星等と共に連想されて注意すべきことである。ロングフェローの詩に

私は天の鍵により

空の弦により、光りの柱により

サミアンの大きなエオリア琴を見た。

七いろの棒をもち、

地面から、天の星へ擧つてゐる。

ボヘミアでは、此の星座は「天の提琴」を呼ばれ、昔しのブリトン人は之れを「アーサー王のハーブ」を呼び、又、ベルシヤ人は「琴」を呼んだ。ノビディウスは之れを「ダギデ王のハーブ」を言ひ、シラーは不思議にも此の星座が救主の生れた「馬槽」で表はすを考へた。

アレン氏の説では、こと座の星を鳥との連想は、古代インドに數千年間も行はれた考へであるといふ。

アラビア人は此の星座を「下降する鷲」にしたが、之れはわし座の「飛び行く鷲」を區別するためであつた。こと座は又、「鷲鳥」や、「鶻」や、「鷹」や、「紙鷲」なごも考へられた。ヒンドウ人はア星をエブ星をゼ星を三角形に見、又は、或る水草の三角果を見た。

此の星々が種々違つた意味に考へられるに不審は多いが、星座としては一般に「こと」をせられ、其うした形は可なり昔しから認められてゐる。今尙あるローマの貨幣には之れが畫かれてゐる。セイス博士によれば、こと座は惡に勝つ喜悅の天の象徴である。初代のクリスチヤンは此の「こと座」を救主の馬槽や、ダギデのハーブを見た。

こと座は其の首星ゼーガの輝やきのために、「夏の天の榮え」をして特に有名である。或る詩人が此のこもこゼーガを歌つて、

此等の星々の一つは

天の四方を遙かまで照らし、  
一等級の光りに輝やく

アラビア人はゼーガ星を「落ちる鷹」を呼んだ。又、此の星は「琴星」「空のアーケ燈」をも言はれる。此の星は著しい青味を帶び、北天に於ける最も美しい星の一つである。

マニリウスは、アウグスト帝の時代の人であるが、ゼーガ星について、

他の星々の前面に、此の一つは  
偉大な光を表はし、驚異の光線を投げる

を書いてゐる。古典時代のラテン詩人たちに、ゼーガ星は「こと」星と呼ばれた。

ことの星よ、女の眼の如く

軟らかき青いろに燃ゆ——キリス

ロマ人たちは、此の星が曉天に西へ没するこもから秋の初めを知るのに此の星を觀た。ブラウンの言に、

「或る時代に、ゼーガは北極星であつたので、アカダイ人には「天の生命」を呼ばれ、又、アシリア人には「天の判者」を呼ばれた。

支那人や日本人はゼーガ星を織女を呼ぶ。此の女は天の河上の鵲の橋の一端に立つて戀人を待つを想像せられてゐる。此の譚はわしの星座の歴史と關係し

てゐる。

ロキア氏はエジプトのデンデラにある或る寺は西暦前七千年のゾーガ星を指してゐるこ言つてゐる。

歳差の現象のために、ゾーガは今後一萬一千五百年頃に北極星となる筈である。

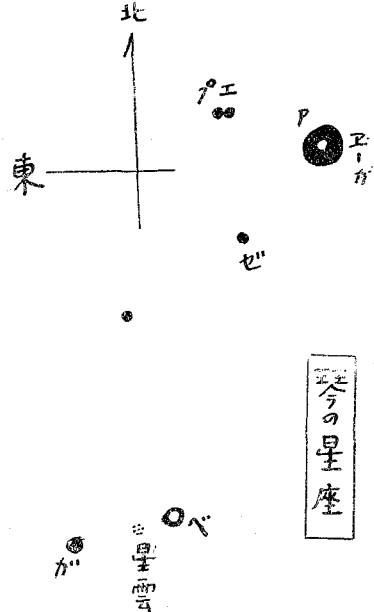
殆んど此の青星の方へ一直線に、我が太陽系は、毎秒十二乃至十五マイルの速度で飛んでゐる。此の太陽全系統の行く先きは「太陽向點」こ呼ばれる。

ゾーガは我が國のあたりから見える星の第二位の光りを放つ。シリウス星のみが此れ以上である。斯うして光りは大きいけれど、ゾーガは吾人に近い星の一つでは無く、ベク氏によれば、之れが十八光年の距離にあるこいひ、他の或る人々は又二十九光年こ言ふ。若し、地球こ太陽の距離を、今、一呎こ取るならば、ゾーガの距離は百五十八マイルこなる。若し、我が太陽がゾーガの地位に置かれるならば、其れは吾人の肉眼に辛うじて見える微光こなるであろう。ゾーガは我が太陽の約百倍の光を有ち、毎秒九マイル半の速度で接近して來てゐる。

サーギス曰はく、「此の星は若い星であつて、白い光を放ち、不思議な寶石のやうな美しい輝やきを投げ、青白色のダイヤモンドから反ね返す透徹光を有つ。」

マーテン夫人は此の輝やかなしい太陽のここを書いて曰はく、

「アークトゥル星より約三時間遅れて、東北の地平より登り來る此の輝やかなしい青星は、晴れやかにまたゝき、人々を立ち所に感動せしめ、恰かもドラマチックの視界に入つて來る。此れがゾーガ星、即ち北極のまはりに春の踊りを踊る輝星三幅對の一つである。五月の初め、此の星は日の落ちるこ略々同時に出現し、夏一ぱい、いつも、いつも、最も晴ればれしく、又、最も惹きつける輝星である。……………ゾーガ星には伴星が一つあるが、よほこ小さく、其のまはりを廻り、色は同じ青味を帯びてゐる。此の伴星は略々十等星で、大望遠鏡でのみ見える。ゾーガは此の伴星より約四千倍の光りである。



ゼーガ星は、一年中毎夜何れかの時刻には見える星で、八月十二日の午後九時に南中する。

このベ星は、アラビア人に「シエリアク」と呼ばれ、有名な變光星である。1784年にグドリクが始めて此の星の變更を發見し、アルゲランダーは、1840年から1859年まで、十九年間、注意深く此れを觀測した。週期は12日と $21\frac{3}{4}$ 時間であるが、不思議な變光を示す。シャイナー氏の言に「こと座ベ星に關係しては、二つ以上の天體があるを見るべきであらう」とある。此の星は梨形の星十個の中の一つで、其の變光は此の形のためらしい。

ベ星とガ星との間に不思議な「輪形星雲」がある。之れは、小さい望遠鏡で見える唯一の輪形星雲である。

エプ星は有名な「二重の二重星」であつて、肉眼にても殆んど二重星であるが其の各々が又二重である。三吋に百三十倍の望遠鏡で此等の星々が別れて見える。

ガ星は、ベ星の東二度半で「スラファト」と呼ばれるが、此の名は昔しの此の星座の名である。又、「ユーグム」とも呼ばれる。3.3 等級の明るい黄星である。

此の星座中の、他の星は特別な興味を惹かない。———ホルコト氏より

註。———W.T. ホルコト氏は米國に現存するアマチン天文家の一人である。變光星學會の幹部であるが、文筆の士であつて、今までに A Field Book of the Stars; In Starland with a Three-inch Telescope; Star Lore of All Ages; Sun Lore of All Age 等の書を出してゐる。此の文は Star Lore 中の一部の譯である。(山本)

### 正確な時 (或新聞より)

去る九日のこゝ、時の宣傳の講演をする早乙女博士が、五分前になつても姿を見せない。自分はタクシーだからと、迎への自動車は、はじめから斷つてゐたので、さアどうした事かと局員は、右へウロウロ左へウロウロ、何しろ時の宣傳者が遅刻とあつてはと青くなつては心配方。



いよいよ間に合はないものと、すっかりあきらめて了つた二分前、青くなつて局員の前へ當の早乙女博士が、ぶらり姿を見せ「未だ二分ありますね」と其の儘スタダオへ。



局員はまるで豆織砲を喰つて虹のやう、目をバチクリやつてゐる間に、サツサと講演をすませて、休憩室へも入らず、「ヤアー」とばかり、姿はふいと表へ消えて了ふ。



お互に顔を見合せた放送局員「何かしら考へさせられるね」「何かしら考へさせられるね」